

1 回 図書館サービス計画検討委員会 (2002年9月25日)

はじめに...

昭和53年1月に八尾市に初めての図書館(現在の八尾図書館)が開館しました。その図書館ができた後、かなり年数はたちますが、平成8年6月に山本図書館、同年11月に志紀図書館が開館し、平成8年度に八尾・山本・志紀という3館体制になりました。ちなみに平成13年度の貸出点数は195万8163点あります。21世紀は生涯学習の時代といわれ、図書館は生涯学習を支援する中核的な存在として今後ますますそのウェイトが大きくなり、そのような流れの中で図書館サービスも大きく変わらざるを得ません。

この八尾図書館はもともと八尾市農協本店を図書館に改装したもので、本来的な用途としての図書館として建てられたものではなく、老朽化も進んでいます。これを機に老朽化した八尾図書館をどうするかを含め、八尾市として長期の展望に立った視点から、これからの八尾市の図書館サービスを考えていきたいということで、当委員会を設置しました。

委員会の設置に先立ち、昨年6月から今年の5月まで1年をかけて、公募市民による「図書館やお市民フォーラム」を開催し、その中で協議されたものを「図書館やお市民フォーラム報告書」という形でこの6月に報告書が出ています。また、昨年11月から12月にかけて、八尾市民を対象にしたアンケート調査も行っており、これは今年の1月に「図書館サービス実態調査報告書」としてまとめております。

これらの八尾市民の図書館に対する思いや意識を汲み、今後の図書館をどうすべきか、また、どうあるべきかを、当委員会の中で、検討していきたいと考えています。

当委員会の開催にあたり、まずは塩見昇先生(大谷女子大学教授)より、「最近の図書館サービスについて」と題して講演をいただきました。

最近の図書館サービスについて(概要)

塩見昇(大谷女子大学教授)

この1~2年で、マスコミ上でも図書館のことが話題になることが多くなってきた。公共図書館のことが話題になるという、いくつかあるが、「図書館は今、もっと変わらなければならない」という議論が多くでてきている。「貸出パラダイム」、「複本問題」、「公共貸出権」など、論じられることが多くなってきた。それとも関連することであるが、図書館計画に関係して、図書館経営が大変多様化し、複雑化しているということも1つのインフォメーションとしてお伝えしておいた方がいいかと思う。公共的な事業の中で、かなり様々な分野で、地方公共団体の行なう事業の一部もしくはすべてを、例えば第3セクターで運営することはできないか、もっと言えば民間企業等に委託できないかという形の経営形態が模索されている。そういうふうに管理運営形態の委託化がすす

んでいる。そういうことの中で、80年代90年代というのは、日本の図書館がかなり高揚し、日本の図書館の基本的な活動の姿が見え出してきた時期であり、そういう中で様々な活動が発展をしてきたのも事実である。例えば、障害者サービスや多文化サービスやビジネス支援など様々なサービスが定着してきている。政治・経済の動向の中で、図書館運営のあり方も苦しい中での選択をせまられてきている。財政難の中で、そういうことも顕在化していく。そういう意味では、図書館サービスをめぐっては難しい時代であろうと思う。しかし、市民の図書館に対する期待は大きい。それに対して、きちんと答えていく責任が行政にはある。基本的なことをきちんと踏まえた図書館整備をぜひやっていただけたらと思う。

検討委員会の中で、協議された内容をQ & A形式にしてまとめてみました。

これからの議論の方向性について

Q. 図書館サイドから、中央館の提案がありましたが、中央図書館について、個別に議論するのか？それとも全体として議論するのでしょうか？

基本的には図書館全般のサービスのあり方を討議して行こうと考えています。その前段として、今の八尾の図書館体制そのものがそれでよいのか、あるべき本来の図書館はこんなものなのか、それぞれの立場で意見をもらえたらと、思っています。そういう中で、現状の体制で、中核となる建物が必要かどうかとか、どのような形で、現状を踏まえて、八尾の図書館の体制があるべきなのか、あるいはそれぞれの立場で考えられる図書館のサービスとはどんなものなのか、検討して行こうと考えています。

現在の3館体制について

Q. 討議に入る前に現在の3館体制について教えてください。

八尾図書館の計画が出た時のことですが、とりあえず、今後の図書館は大きな図書館で機能するものではないから、とりあえず地域図書館が必要で、要するにサービスの範囲は全市を対象にするようなものではなく、とりあえず周辺の人しか対象にできないものであって、従って、山本・志紀など人口の集積している地区に同規模の図書館をつくりなさいというのが、昭和52年に出された「八尾市の図書館設置計画について」(答申)でした。中央図書館というのはそれ以降の話で、3館だけではすべてのサービスを満足できるものではないので、3館がとりあえず揃った上で、中央図書館を考えて行きましょうということでした。

そういう大きな流れの中で図書館を整備してきて、3館体制というのが曲りなりに完成しました。図書館というのは個々に機能するものではなく、複数の図書館が、システムとして相互に連携しながら、補い合いながら全体として動かなければなりません。その時の核になるものを作らなければなりません。その核になるものとして、どこがふさわしいのかとなれば、最終的に八尾図書館になりました。大きな一つの理由というのが市役所の事務とか財政の問題とか、移動図書館

がここにしか置けなかったことです。八尾図書館が「とり合えず中央図書館的なもの」として機能させていくということになりました。

平成8年以降、それなりに動いてきて、市民1人当り、7.1冊というレベルまで貸出を伸ばしてきました。これは大阪府内では立派な数字です。基本的なことを踏襲してきて、それなりに動いてきたといえます。今後、図書館サービスを考える上では、これをいかに発展させていくとか、手の届かないところはどこか、レベルを上げていかなければならないところはどこか、今の曲りなりに動いているシステムのどこを強化していくのか、どこに手を入れていくのかということが、今後の筋道になるといえます。

中央図書館とはどういうものですか？

Q. 中央図書館という話がでしたが、中央図書館とはどういうものですか？

中央図書館は、地域図書館資料の一括受け入れや図書館サービス網全体の活動調整などの図書館システム全体を統括するセンター機能、それから地域全体に対する参考調査図書館としての機能、保存図書館としての機能などを有する図書館です。

この委員会を立ち上げるにあたり、まず、老朽化した八尾図書館をどうするかという問題が出てくると思います。八尾市の最初の図書館として開館した八尾図書館ですが、建物自体は昭和36年に八尾市農協として建てられたもので、築後40年を経過しており、補修箇所が増え、建物そのものの老朽化が進んできています。元々図書館として建てられたものではないので、閲覧スペースがなく、段差も多く、高齢者や障害者には利用しにくい施設になっています。

平成8年以降、3館体制で図書館を運営しているが、中央図書館と地域図書館の体制に改めたいと考えています。3館のうち八尾図書館はシステム全体を統括するという機能をもっているが、参考調査や保存図書館としての機能は不十分です。市民へのサービスをさらに充実させるためには中央館の設置が望まれます。財政的なこともあります。図書館サイドとしては、最終的には3つの地域図書館と中央館という体制がベストであると考えています。老朽化する八尾図書館と中央館建設についても委員会の中で検討いただけたらと思います。

財政難の時代に図書館なんて！？

Q. 財政難に新しい「ハコ物」を作る計画なんか受け入れられるでしょうか。

財政を考えすぎると、何も話ができないということになってしまいます。今回の「図書館サービス計画」については、現状を踏まえた中で、図書館サービスがどうあるべきか再構築するという必要性もあって検討委員会を始めたわけです。当然その中にはソフト面もあれば、ハード面も含めて、現実に図書館のサービス体制というのはどうあるべきか論議しなければならないだろうと考えています。

中央図書館のみでいいのか、もっと身近にたくさんの図書館があった方がいいのかとかいろんな意見が出て来るかと思いますが、財政面で縛ってしまいますと議論が進みません。八尾の現状の3館体制を踏まえる中で、今後、より市民のニーズに応えるためには、八尾図書館をどうするかということも含め、八尾市の図書館の体制としたらどうあるべきか、論議していこうと考えています。

まとめ

現在の八尾図書館は老朽化も進み、もともとは図書館専用の建物ではないという構造上の問題もあり、補強は可能であっても図書館そのものの拡張は難しいという制約もあります。しかし現在、検討いただきたいサービス計画は八尾市のこれからの長い期間にわたる図書館サービスのあり方について検討する中で、当然いま、八尾市の財政状況を考えれば全てのことが出来ないという制約があります。財源等は一旦棚上げにして、図書館サービスそのものを考えるとすればどのような形のことを考えていかなければならないのか、というところから次回以降検討することいたします。